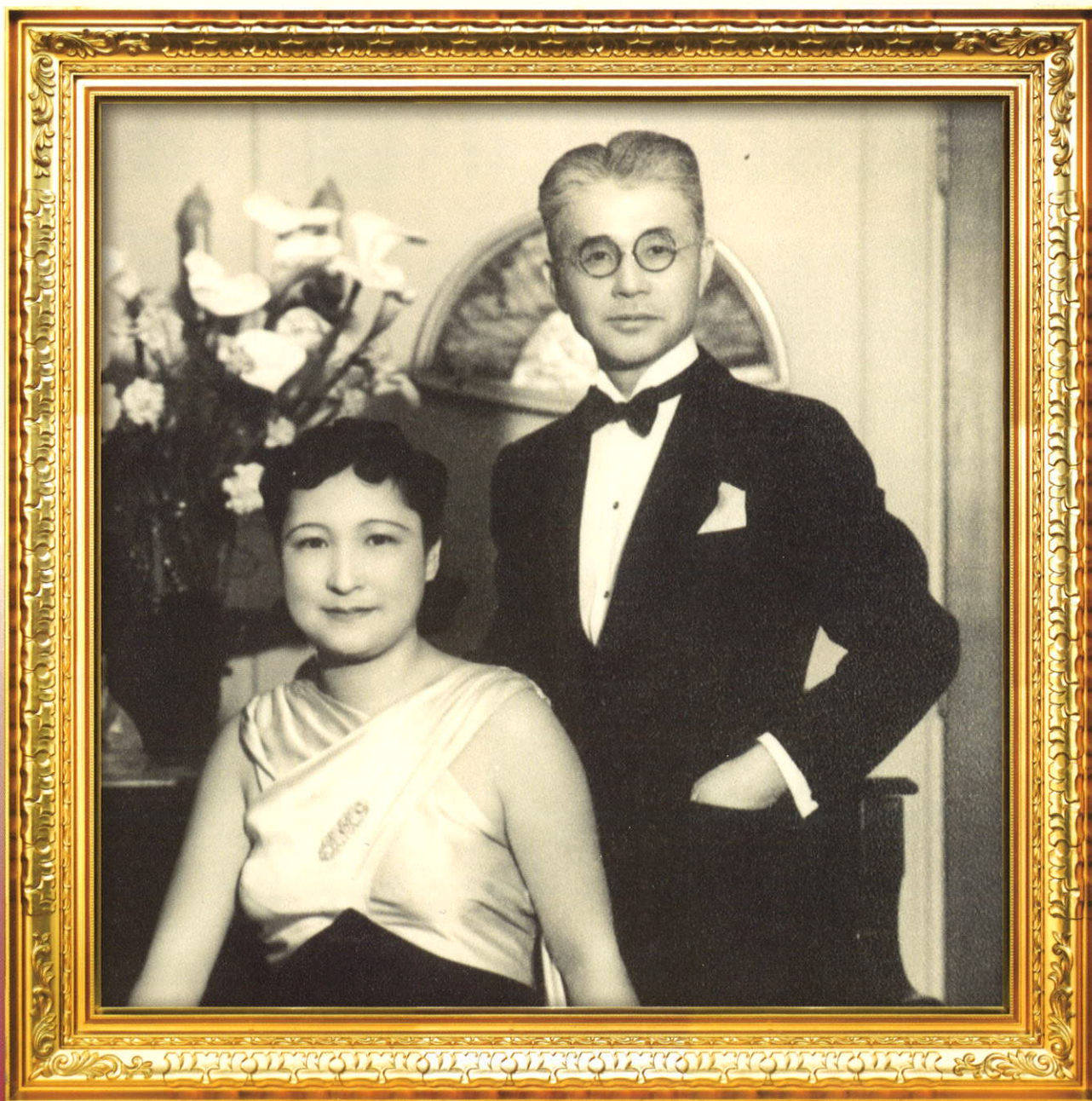


さわ だ れん ぞう み き 澤田廉三と美喜の時代

— 鳥取県が生んだ偉大な外交官の足跡 —



写真提供／影山智洋氏（影山写真事務所）

会期 平成20年 **10月17日(金)～11月23日(日)**

午前9時～午後5時 会期中無休 **入場無料**

場所 **鳥取県立公文書館 1階** (展示コーナー)

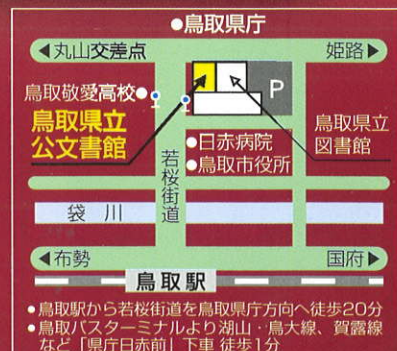
お問い合わせ

鳥取県立公文書館（鳥取市尚徳町101） TEL 0857-26-8160

E-mail kobunsho@pref.tottori.jp

ホームページアドレス <http://www.pref.tottori.lg.jp/kobunsho/>

この用紙は再生紙を使用しています



記念講演会
入場無料

とき／11月8日(土) 午後2時～4時
講師／酒井哲哉氏(東京大学教養学部教授)
演題／昭和の外交官の系譜—澤田廉三の軌跡—
場所／鳥取県立図書館2階(大研修室)

巡回展
入場無料

会期／11月29日(土)～12月21日(日)
午前9時～午後5時 会期中無休
場所／岩美町中央公民館(岩美町浦富1038-6)
電話／0857-72-0510

誕生から青年期まで

澤田廉三は、明治二一（一八八八）年一〇月一七日、岩井郡浦富村（現岩美町浦富）に、父信五、母久子の三男として誕生しました。信五は、兵庫県二方郡東浜村（現新温泉町浜坂）の富商森家の出身で、浦富の素封家澤田家に入りました。

浦富の小学校を終えて、鳥取中学に進学した廉三は、鳥取市内に下宿し、親族の森梅園が開く味道館で漢学を学ぶ一方、鳥取教会のパートレット氏から英語を学ぶ機会に恵まれました。後年、廉三は、バートレット氏宅のバイブルクラスに通って英語を学んだことが外交官を志望するきっかけになったと回想しています。また、四歳年上の兄節蔵は、廉三より五年早く外交官となり、国際連盟事務局長やブラジル大使などを歴任しました。



幼少の頃
エリザベスサンダースホーム蔵

廉三は、鳥取中学を卒業した後、第一高等学校を経て、東京帝国大学法科

大学フランス法律科に進みました。成績も優秀で、卒業後の大正三年一〇月、外交官試験に首席で合格しています。

世界へ、そして美喜との結婚

外務省入省後、外交官補、書記官として経験を積む一方、第一次世界大戦後の講和会議や国際連盟の第一回総会に随員として参加するなど、数々の国際会議にも出席しました。



外務省入省当時（大正3年頃）
エリザベスサンダースホーム蔵

その間に、三菱財閥三代目の岩崎久弥の長女美喜との婚約が決まり、大正一年七月一日に明治学院チャペルで挙式しました。美喜の親族には加藤高明、幣原喜重郎など日本を代表する政治家、外交官がいます。

美喜との結婚後、アルゼンチン、中国、イギリス、フランス、アメリカ等の諸外国に赴任しました。この間、書記官から参事官、総領事、大使へと昇進を続けていきます。

妻の美喜も外交官夫人として四人の



廉三・美喜夫妻と長男信一氏
（大正13年）
影山智洋氏蔵

子どもを育てながら、廉三の赴任先に同行しました。特に在英時代に訪れた孤児院ドクター・バナードス・ホームに大きな影響を受け、戦後、エリザベスサンダースホームを設立するきっかけとなりました。

昭和天皇と廉三

昭和天皇と廉三の接点は、皇太子時代にさかのぼります。大正一〇年三月から九月にかけて行われた皇太子のヨーロッパ外遊時には、パリに約一ヶ月滞在した皇太子の通訳兼案内役、また撮影係として活躍しました。この時、兄の節蔵は、供奉員として出発から帰国まで随行しています。

また、昭和二年から五年までの期間、宮内省御用掛として、昭和天皇に身近に接する機会を持ちました。昭和三年に行われた即位の礼には廉三も参列しています。昭和天皇に親しく接する機会は戦後になっても続きました。

フランス在勤時代

フランス在勤が廉三にとって最も長い外国滞在となりました。昭和七年から九年にかけての滞在では、戦争の足音が聞こえてくる中、代理大使としての重責を果たしています。一方、妻の美喜は画家マリー・ローランサンや舞踏家ジョセフィン・ペーカーらとの交流を始め、絵画の活動を熱心におこなった時期でした。最後のフランス在勤は、外務次官を

辞した直後に大使として派遣されたものです。この時期のフランスはドイツの侵攻に直面し、パリを脱出した廉三たちは、ヴィシーに移された大使館で難しい問題を処理しなければなりません。廉三の赴任先には必ず同行していた美喜でしたが、戦乱の続くフランス行は断念しました。

このような激動の時期をすごしたフランスへの想いは特別だったようで、戦後、廉三が記した回想録も『凱旋門広場』と名づけられています。



外務次官の頃（昭和13年）
エリザベスサンダースホーム蔵

戦乱の中で

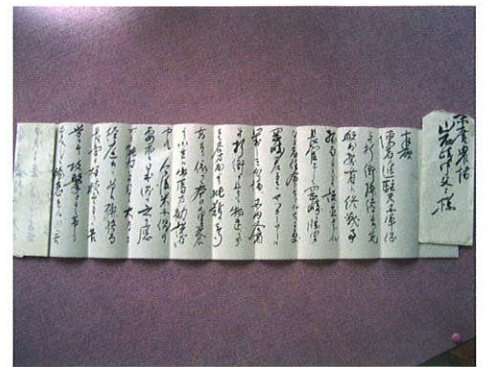
第二次世界大戦による混乱の中、昭和一五年末にフランスを後にした廉三は、昭和一八年七月、当時の大東亜省（満州・中国・東南アジア地域の政務を執行する機関）の管轄下にあったビルマへ初代大使として赴任、翌年までその任にありました。この間、ビルマでは空襲や館員の多くが風土病に見舞われるなど、廉三も多くの困難に直面しました。廉三自身も東京からビルマへの帰任途上、日本軍からの誤爆を受け、九死に一生を得ています。

廉三は、ビルマ大使を辞した後、二度目の外務次官に任じられています。これは、入省以来親交のあった外交官の先輩で、当時、外相であった重光葵の要請によるものと思われま

戦後の活躍

― 重光葵との連携 ―

激化する空襲を避けるため、昭和二〇年五月に美喜は長女を伴って、廉三の郷里である浦富に疎開しました。この時期、在京中の廉三と美喜の間で頻繁に手紙のやりとりが行われます。この手紙により、同年五月に外務次官を辞した後、廉三が重光と頻繁に連絡を取り合っていたことがわかります。



廉三が義父岩崎久弥に宛てた手紙
(昭和20年9月8日付)
エリザベスサンダースホーム蔵

戦後間もなく、重光は外務大臣となり、廉三は、戦後日本の新しい体制を模索するため、重光と連絡を緊密に取りつつ活発に活動していたことが美喜宛の手紙からわかります。この他、重光がGHQのマッカーサー総司令官と頻繁に接触していたことから、重光經由で聞いた上層部の情報を義父である岩崎久弥に伝えていきます。

やがて、重光が外務大臣の職を解かれ、戦犯として収監され、廉三も昭和二一年七月に公職追放となったため、政治・外交への進出が難しくなりました。

世界の母として

美喜は、政府に接収されていた神奈川県大磯町の岩崎家別荘を買い取り、昭和二三年、エリザベスサンダースホームを創立します。ホームの名称は、

日本に長く住んだイギリス人女性エリザベスサンダースの遺産をホーム設立の基金としたことに由来します。ここで美喜は、占領軍兵士と日本人女性との間に生まれた混血児の保護・養育に生涯をささげました。



エリザベスサンダースホームからは約二千人の孤児たちが集った。

影山智洋氏蔵

混血児たちに対する偏見や差別などもあり、ホームの経営には苦労が絶えませんでした。美喜は外交官夫人時代に築いた人脈や持ち前のねばり強さでこれらの難関をくぐりぬけていきます。毎年、夏になると美喜は園生たちを連れて、浦富にある澤田家の別荘「鷗鳴荘」にやってきました。昭和四〇年になるとブラジルに聖ステパノ農場を創設し、卒園生を送り込んで開拓する計画を建てるなど、卒園生たちの中には海外に巣立っていく者もありました。

国連大使として

廉三は、昭和二七年に公職追放が解除されるまでの間、大磯で趣味の俳句を詠む他、郷里の岩美や鳥取などに帰り時をすごします。その一方で有力政治家と接触を続け、そして追放解除後、鳥取から参議院選挙に出馬する予定でしたが、この時、吉田茂首相より国際連合加盟という重要な使命を命じられ、国政への出馬は断念しました。

昭和二八年三月、在ニューヨーク国際連合日本政府代表の特命全権大使に任命され、渡米します（翌年四月からは国際連合日本政府代表部長）。当時、日本はソ連の拒否権発動により、未だ国際連合への正式加盟を認められてい



昭和28年、国連代表として渡米。右は秘書として同行する長男信一氏

梧山塾蔵

ませんでした。このため、廉三は国連のソ連代表部を始めとする諸外国とのいわゆるロビー外交や水面下での接触を行いました。この間、日記に近い形で詠んでいた俳句は一句も作られることがなく、国連復帰のための活動に全精力を注いでいたことがわかります。

日本は昭和三十一年一月、国連に復帰しました。廉三は、国連復帰を目前に大使の職を辞したので、国連復帰後の初代大使とはなりませんでしたが、それに値するだけの職責は十分に果たしたといえるでしょう。

廉三の俳句

廉三は、外交官として欧米滞在が長かったため、語学や西洋流の礼儀作法を身につけていましたが、中学時代は儒学を基礎とした漢学を学んだので書もよくしました。書には「梧山」という号をよく利用しましたが、これは、出身地岩美町にある古城「桐山城」からとつたと述べています。

一方、重光葵から勧められて始めた俳句も終生詠み続け、多くの俳句を残しています。俳句では、「沙鷗」という号を好んで使用しました。これも故郷岩美の海岸をイメージした俳号です。このように廉三の趣味も、故郷と深く結びついています。

他方、廉三の故郷を思う気持ちは、大変篤く、忙しい公務の間にもできる限り故郷浦富に帰ってきました。昭和十一年には熊井浜に別荘を建て、鷗鳴荘と名づけ、しばしばここを利用しました。前述したとおり、戦時中、美喜は娘を連れてここに疎開しています。また、戦後も、エリザベスサンダースホームの園生達の夏の臨海学校としてよく利用されました。

この他、「愛国は愛郷」からという信念のもと、岩美町を中心として先人達の顕彰にも尽力しています。



戦前の鷗鳴荘の様子。戦後、焼失するが再建され、現在も残る。

エリザベスサンダースホーム蔵

県政顧問として

国連大使を退いた後、昭和三十三年には、未だ国交を回復できずにいた韓国

との全面会談に代表として臨み、その後の日韓基本条約締結への道筋を築きました。



第1回県政顧問会議（昭和40年6月）。右から二人目が澤田廉三。

鳥取県立公文書館蔵

対外的な仕事年とともに難しくなった廉三ですが、最晩年の公務は石破二郎知事のもとで、昭和四〇年に就任した鳥取県の県政顧問の職でした。観光政策を始め、県内のインフラ整備や教育問題など幅広い分野に渡って建設的な意見を出しました。そして、昭和四五年一月二日、県政顧問在職のまま亡くなりました。

妻の美喜はエリザベスサンダースホームの経営に終生全力を注ぎ、昭和五五年五月二日、旅行先のスペイン・マヨルカ島で亡くなりました。

廉三の遺志に従い、二人は浦富の海の見える小高い墓地に眠っています。

● 協力者一覧

今回の展示にあたり、社会福祉法人エリザベスサンダースホーム及び澤田信一氏より、資料の提供など多くのご協力を賜りました。また、以下の関係機関や個人の方からもご協力を賜りました。

国立公文書館、外務省外交史料館、聖ステパノ学園、澤田美喜記念館、ポールラッシュ記念センター、浜坂先人記念館以命亭、岩美町、田後漁業協同組合、鳥取県立博物館、鳥取県立図書館、鳥取敬愛高等学校、梧山塾、影山智洋、油浅郁夫、栗村哲象、酒井哲哉、奈良岡聡智、青木富貴子、小山富見男、鯛 茂、山根乙彦、山川和美、牧野和春、矢谷信通（敬称略、順不同）

平成20年度特別展 澤田廉三と美喜の時代

平成20年10月印刷・発行